

キリスト教でのお葬式に参列したことがあるでしょうか。お祈りや詩編の交唱など、一般の参列者も声を出す場面が多く見られますが、賛美歌をうたうことも大きな特徴だといえます。

なぜ礼拝の中で歌うのでしょうか。それは神さまに感謝をあらわし、また神さまの栄光をたたえるためです。旧約聖書の中にある「詩編」は、ユダヤ教の中でも歌われていたそうです。新共同訳聖書の詩編をみると、例えば詩編第3編3節に「[セラ]と書いてあります。これはここで、音程をあげるという意味だそうです。

ユダヤ教の歌う伝統は、キリスト教にも受け継がれていきます。イエス様も最後の晩餐のあと、弟子たちと共に賛美の歌をうたってから、オリーブ山に出かけたとあります。

またルカによる福音書に出てくるマリアの賛歌やシメオンの賛歌も、賛美の一つと考えることができます。

キリスト教の礼拝形式が定まっていく中で、礼拝の中でうたう音楽が定まっていきます。「キリエ(主よ憐れみをお与えください)」、「グローリア(大栄光の歌)」、「サンクトゥス(聖なるかな)」、「アニュスデイ(世の罪を除く神の小羊よ)」などは、現在の聖公会でもチャントを用いてうたっている教会が多くあります。

また賛美歌集は、教派によっていろいろなものがあります。日本聖公会では2006年に、それまでの古今聖歌集から日本聖公会聖歌集に改訂しました。また多くのプロテスタント教会で使われてきた讃美歌(54年版)も改訂され、讃美歌21が使われています。

賛美歌の中には、ハイドンやモーツァルト、ベートーヴェンの曲などもあります。また「いつくしみ深き」などは、結婚式やお葬式でよく用いられますので、知っている方も多いのではないのでしょうか。

次回は「三位一体」です。お楽しみに。



「受胎告知」

オラツィオ・ジェンティレスキ

(1563~1639年)

一同は賛美の歌をうたってから、オリーブ山へ出かけた。

(マルコによる福音書14章26節)

